

フランシス・ハチスンとアダム・スミスに関する比較分析 ——単純性を志向する人間の傾向性について——

太田 浩之

はじめに

18世紀スコットランドの哲学者アダム・スミス（1723-1790）は、『国富論』（1776）の著者であることから一般に「経済学の父」として知られているが、『道徳感情論』（以下『感情論』）（1759）で道徳理論を展開している。『感情論』第四版で追加した副題によって明確にしているように⁽¹⁾、その著作は、我々が他者や自分たちに対して行っている道徳判断の仕組みを明らかにすることを主たる目的としたものである。

こうしたスミスの思想形成には多様な要素が関係していると考えられるが、スミスの思想に強い影響を与えた人物の一人として「スコットランド啓蒙の父」(Scott 1900, 261) と評されるフランシス・ハチスン（1694-1746）がいる。グラスゴー大学の学生時代にハチスンの講義をスミスは受講しており、晩年（1787）の手紙でも「決して忘れることができないハチスン博士」（CAS 274）という記述を残すほどハチスンの存在はスミスにとって大きかった⁽²⁾。本稿は、こうしたスミスとハチスンとの間に見られる関係に光を当てたものである。

スミスとハチスンの両者を扱った研究として多く見られるのは、自然法思想や政治理論という視点から考察を行なったものである⁽³⁾。そうした研究において、とりわけハチスンの美的感覚に関する議論が取り上げられることはほとんどない。それに対して本稿では、ハチスンの美的感覚に関する議論とスミスの議論との関係という従来の研究で十分に論じられてこなかった問題を扱うことによって次の点を明らかにする。それは、スミスとハチスンの両者が、（1）道徳理論を構築する際に道徳的経験を重視するという基本的な姿勢を共有し、（2）簡潔な説明原理を求める人間の傾向性があることを認め、同時にそうした傾向性をもつ危険性を認識していたことである。つまり、理論構築における道徳的経験の重視、そして簡潔な原理を志向する人間の傾向性に対する認識という二つの点において、スミスとハチスンとの間に密接な関係があることを明らかにするのが本稿の目的である。

以上の点を論じるために、以下では議論を大きく二つに分けて論じていく。まず第一節と第二節ではスミスに関する分析を行う。第一節では『感情論』第七部の考察を行う。そこでの意図は、スミスが、『感情論』の構築にあたって個別的な道徳的経験を重視していたこと、そして道徳的経験に即した理論形成を妨げる要因として、簡潔な説明原理を好む人間の傾向性があると認識していたことを確認することである。『感情論』第七部でスミスは、彼以前の様々な道徳理論を批判的に考察しており、そこでの批判的な眼差しを検討することによって、以上の点を浮き彫りにすることができるだろう。続く第二節では、「天文学史」の考察を行う。ここで「天文学史」を分析する理由は二つある。一つは、「天文学史」の分析を通して第一節で提示する解釈の妥当性をさらに示すことができるからであり、もう一つは、「天文学史」の分析によってハチスンとの明確な比較が可能になるからである。以上二つの節によってスミスが道徳的経験を理論構築の際

に重視していたということ、そして理論構築の際に単純性を好む人間の傾向性に十分な注意を払っていたことを示す。

スミスに関する考察に続いて第三節ではハチスンの分析を行う。ここでは、最初に、ハチスンも道徳理論形成の際に道徳的経験を重視していたことを確認する。その上で、『美と徳の観念の起源の探究』〔以下『探究』〕(1725) 第一論文に依拠しながら、簡潔な説明原理を志向する人間の傾向性にスミスと同様ハチスンも気がついており、ハチスンがそれを美的感覚として論じていることを明らかにする。さらに、その人間の性向のために、不合理な仕方でも単純な理論を人は形成してきたというハチスンの認識を確認する。それによって、そうした人間の傾向性が経験や観察を軽視あるいは無視した理論構築につながりうるというスミスの見解と同様のものをハチスンが共有していたと論じる。以上の議論によって、従来の研究では着目されてこなかった側面からハチスンとスミスとの間にある類似性を明らかにする。そして、論文の最後では、本稿で明らかにした両者の関係がどのような含意を持つのかという点について一つの解釈を提示することで議論を締め括る。

1. 『道徳感情論』第七部におけるスミスの批判的観点

スミスは、自身の方法論について明確に論じていないが、『感情論』を構築するにあたって経験や観察を重視する経験主義を採用しているということが広く言われている⁽⁴⁾。道徳的経験をスミスが重視しているということは、『感情論』で日常的事例についてたびたび言及をしたり、読者の経験にうったえるような記述を『感情論』に多く残したりしていることから明らかであるように思われる。しかし、理論構築の際に道徳的経験を重視するスミスの姿勢が最も際立つのは、学説批判を展開している『感情論』第七部であると考えられる。スミスは、『感情論』の最終部に当たる第七部「道徳哲学の諸体系について」で、ようやく道徳理論が扱うべき問題とは何かを明らかにし、彼以前の道徳理論に対する批判的検討を行う。まずは第七部の大きな構成について述べておく必要があるだろう。

道徳的原理を論じる際には、取り組むべき二つの問題があるとスミスは述べる。それらは、第一に徳の本質は何か、第二にある性格を好ましいものとして、別の性格を好ましくないものとして人が判断するのは精神のいかなる能力によってか、である(TMS VII. i. 2/下220-221頁)。これら二つの点からスミスは様々な道徳理論を整理していく。

一つ目の徳の本質という観点では、従来の道徳理論が三種類に分類される。スミスによれば、(1) ある道徳理論では徳の本質が適宜性にあると論じられる。より具体的に述べると、一つの特定の情動にではなく、あらゆる情動の適切な統制と方向づけに徳の本質があると主張するのがこの立場である(TMS VII. ii. intro. 1/下223頁)。(2) 別の道徳理論では徳の本質は、自分自身の私的利益や私的幸福の賢明な追求、すなわち慎慮にあると考えられている(TMS VII. ii. intro. 2/下223頁)。(3) さらに別の道徳理論では徳の本質は、他者の幸福を目指す情動に、つまり私心のない仁愛にあると主張される(TMS VII. ii. intro. 3/下224頁)。以上三つの分類に入らない例外として徳や悪徳の間に本質的な差異は存在しないと主張する学説を挙げており、これについてもスミスは検討している(TMS VII. ii. 4. 6/下316頁)。

二つ目の道徳能力という観点から見た場合にも、三種類に分類して道徳理論を整理することが

可能だとスミスは考える。ある立場によれば、自己愛によって、別の立場によれば理性によって、さらに別の立場によれば感情によって我々は道徳判断を行うとスミスは述べる（TMS VII. iii. intro. 2/下333-334頁）。スミスは、まず徳の本質に関係する上の四種類の学説について検討した後で⁽⁵⁾、道徳能力という点からこれら三種類の学説について順次検討している。

『感情論』第七部で様々な道徳理論を整理する際のスミスの議論は以上のような構成をとっており、そこではスミス自身の道徳理論も整理の対象となっている。スミスは自分の理論を、徳の本質を適宜性に見るものとし（TMS VII. ii. 1. 11/下232頁）、感情によって道徳判断を説明する立場として示している（TMS VII. iii. 3. 16/下362-363頁）。だが、第七部でスミスは単に彼以前の道徳理論を整理しているだけではない。自分の理論との違いを強調するために、いくつかの箇所では批判的検討を行なっている。本節で注目したいのはこの点である。

まずは、道徳理論を批判的に検討する際のスミスの観点を理解しなければならない。これに関しては、『感情論』第七部冒頭の記述が重要な手がかりを与えている。スミスは以下のように述べている。

もし我々が、道徳感情の本性や起源に関して提示された様々な理論のうちで最も有名で最も目立ったものを検討するならば、それらの理論のほとんど全てが、私が説明しようと努めてきた理論のどこかある部分と一致するということが分かるだろう。また、もしこれまでに私が主張してきたことを十分に考慮に入れれば、自然のどの外観あるいは側面によって各々の著者が彼独自の体系を形成したかを説明するのに困ることはないと分かるだろう。これまで世間でいくらか好評を受けたあらゆる道徳体系は、おそらく究極的には、私が明らかにしようと努めてきた諸原理のある一部に由来するのである。この点でそれらの理論はすべて自然的原理に基づいているので、どれもある程度は正しい。しかし、それらの理論の多くは自然についての部分的で不完全な見解に由来しているため、それらの理論の多くは、いくつかの点で間違ってもいるのである。（TMS VII. i. 1/下219-220頁）

この箇所から読み取ることができる重要な点は、道徳感情あるいは道徳判断の本性というものを最も正確に扱った理論を提示しているとスミスが自負していることである。引用において、先行する諸理論が自然（本性）についての部分的で不完全な見解に基づいて形成されていることをスミスは指摘している。さらには、自分の理論と従来の道徳理論とがある部分で一致するとスミスは主張している。これらからスミスが、道徳判断という道徳的経験の本性を余すところなく正確に捉えることを『感情論』において重視していたと解釈することができるだろう。

この点を例証するために、徳の本質を慎慮にみる学説をスミスがどのように評価しているかを見ておきたい。スミスは、その種の学説の最も古い体系としてエピクロスの学説に注目する。スミスによるエピクロスの理解は次のようなものである。エピクロスは、自然的欲求・嫌悪の唯一の究極的な対象を身体的快樂・苦痛とし、精神的快樂・苦痛も究極的には身体的快樂・苦痛に由来すると主張する（TMS VII. ii. 2. 3/下285頁）。とはいえ、身体的快樂・苦痛よりも精神的快樂・苦痛の方が圧倒的に大きいものだということも認めている（TMS VII. ii. 2. 4/下285-286頁）。そこからエピクロスは、人間の完全な幸福が身体の安楽と精神の平静にあると考える（TMS VII. ii. 2. 7/下228頁）。そして、この完全な幸福という自然的欲求の最大の目的を獲得することが徳

の唯一の対象とされ、慎慮があらゆる徳の源泉だとされる (TMS VII. ii. 2. 7/下228頁)。というのも慎慮は、行為の離れた帰結を見通すような注意深さや慎重さというような精神の性質であり、最大の善を獲得し最大の悪を避けることを可能とするような精神的性質であるため、幸福の実現に最も役立つからである (TMS VII. ii. 2. 8/下228頁)。

スミスは、エピクロスの学説が自分の理論と全く両立するものではないとしつつも (TMS VII. ii. 2. 13/下292頁)、第七部冒頭の記述と符合するように、依然としてエピクロスの学説が道徳判断の一側面を捉えていることを示唆している。

しかしながら、自然のどの様相から、もし私がそう言ってよければ、自然のどの特定の外観や側面から、この〔エピクロスによる〕ものごとの説明がそのもっともらしさを引き出しているのかを見つけることは難しくない。(TMS VII. ii. 2. 13/下292頁)

この箇所ですべて述べているように、スミスはエピクロスの理論も道徳判断のある特定の側面に触れているために説得性を持ったものに見える」と主張する。だが、エピクロスの学説は道徳判断の一側面しか捉えていない点で道徳理論としては不完全で問題を含む理論なのである。

こうしたスミスの論調は他の道徳理論に関しても一貫して見られる。例えば、徳や悪徳の間に本質的な区別はないと主張するために有害な傾向を持つとされるマンデヴィルの学説さえ、道徳判断のある現れを特定の仕方で見ただけには説得的なものであるように見えるとスミスは認めている (TMS VII. ii. 4. 6/下316頁)。つまり、「それ〔マンデヴィルの体系〕がいくつかの側面で真理に接するものでなかったならば」(TMS VII. ii. 4. 14/下330頁)、あのように多くの人々に影響を与えることは決してなかっただろうとスミスは論じるのである。だが、ここでも注意が必要なのはマンデヴィルの学説は、ある側面で真理に接するものであったとしても、言い換えると、道徳判断のある特定の側面を把握するものであったとしても、道徳判断の一部しか捉えていないという点では不十分な理論だということである。

このように道徳判断の特定の側面しか捉え切れていないという点を一つの重要な観点として、スミスは様々な学説を『道徳感情論』第七部で整理している。このことに関連して、見逃すことのできない点の一つがある。それは、道徳判断の一側面だけに依拠して理論を構築することの原因についてもスミスが触れていることである。スミスは、そうした理論構築が人間のある心理的傾向に由来すると考えている。例えば、エピクロスの学説を整理した上でスミスは次のように述べている。

異なるすべての徳をこの一つの種類の適宜性にまとめることによって、エピクロスはある性向に熱中した。その性向とは、あらゆる人にとって自然的なものであるが、特に哲学者が自分たちの才能を誇示するための大きな手段として異常な愛着をもって育むものである。それはつまり、可能な限り少ない原理からあらゆる現象を説明しようとする性向である。(TMS VII. 2. 14/下295頁)

ここで言われているように、可能な限り少数の原理によって現象を説明するという人間の傾向をエピクロスのような学説が生じた一因としてスミスは捉えている。スミスが言うように、あら

ゆる徳の源泉を慎慮に見ることでエピクロスはこの性向を満足させることができたかもしれない。だが、他方でその傾向に甘んじるあまり、エピクロスは道徳判断という現象全体を正確に捉えることができず、不完全な理論にとどまっているとスミスは考えている。

以上の考察を踏まえると『感情論』第七部でスミスは、従来の道徳理論が道徳判断という道徳的経験の不十分な理解にとどまっていることを指摘しつつ、それらを批判的に整理していると言えるだろう。このことは、道徳的経験により即した理論を形成している点で自身の理論が優れているとスミスが考えていたことを示唆している⁽⁶⁾。また、『感情論』第七部の議論は『感情論』の最終部におかれているものの、そこから読み取ることのできるスミスの意図は『感情論』全体にわたって関係するものだけということになるだろう。『感情論』はグラスゴー大学教授時代の講義が基になっているとされるが、第七部の議論は講義では冒頭で述べられていたのではないかと考えられている (Raphael 1979, 90-91)。そうであるならば、『感情論』において何よりもスミスが重視したのは、あらゆる道徳的経験に正確に即した理論を構築することだったと推測できる。自分が「愛好していた体系を支持するという熱意に駆られて、その体系を説明するために利用した諸現象をスミス氏が損ねたり曲解することは決してなかった」(Account Note C/165-166頁) というデュガルド・スチュアートの証言はこの解釈を傍証している。そしてまた、スミスは道徳的経験に即した理論形成を妨げる要因として、ある人間の心理的傾向に言及していた。それは、少数の説明原理を好む人間の傾向性である。したがって以上の考察から、道徳的経験を正確に捉えることを重視しながらスミスが理論構築を試みていたこと、そしてその際に、簡潔な説明原理を志向する傾向性をもつ危険性を認識しながらそれを行っていたことを読み取ることができる。本節で提示したこうした解釈を「天文学史」の分析を通じてさらに示すことが可能である。

2. 「天文学史」におけるスミスの理論理解

「天文学史」は、遺言執行人であるジョゼフ・ブラック (1728-1799) とジェームズ・ハットン (1726-1797) によってスミスの死後1795年に出版された『哲学論文集』の中の一論文である⁽⁷⁾。「天文学史」と一般に称されるこの論文のタイトルは、正式には「哲学的探究を導き指導する原理—天文学の歴史によって例証される」である。このタイトルから推察できるように、「天文学史」において天文学の歴史はあくまでも哲学的探究を導くような原理を論じる際の一つの例証として位置づけられている (C. Smith 2016, 92)⁽⁸⁾。本節ではこの「天文学史」を分析する。確かに「天文学史」は『感情論』でのスミスの意図を直接的に読み取るのに適した資料ではないかもしれないが、哲学的探究のあり方を論じた「天文学史」での発想が『感情論』形成の際に全く影響しなかったということは考えにくい (C. Smith 2016, 101; Skinner 1974, 179)⁽⁹⁾。「天文学史」の考察を通じて、経験的観察を重視するスミスの姿勢と現象を可能な限り少数の原理によって説明するという人間の傾向性に対するスミスの認識とを前節とは違った側面から把握することができるだろう。

2.1. 驚愕と驚異

まずは「天文学史」の概要を把握することから始めたい。「天文学史」は哲学的探究を導く原理の考察を主題としたものであるが、冒頭でスミスは驚きに関する三つの異なる感情を分析する。

なぜスミスがいきなり感情の分析から始めているか疑問に思われるかもしれないが、後述するようにスミスは哲学的探究という行為を感情によって基礎づけようとした。スミスの議論の流れにしたがって、ここではスミスの感情分析を見ておきたい。

スミスによれば、驚異 (Wonder)、驚愕 (Surprise)、驚嘆 (Admiration) は混同されることが多いが、相互に区別できる異なる感情である (*Astronomy* intro. 1/6頁)。驚異は新しく珍しい (new and singular) ものによって、驚愕は予期せぬ (unexpected) ものによって、驚嘆は偉大であったり美しい (great or beautiful) ものによって引き起こされるとスミスは述べる (*Astronomy* intro. 1-5/6-7頁)。その上で、一般に思われているよりも影響力を持つとスミスが考えるこれらの感情の本性或原因について考察することが「天文学史」の意図だと明言される (*Astronomy* intro. 7/8頁)。

天文学の歴史に関する叙述で、これらの感情に言及しつつ議論を展開しているのが、スミスが哲学的探究の諸原理をこうした感情分析によって基礎づけようとしていることは明らかなように思われる。だが、スミスが人間の感情と哲学的探究とを関連づけて論じているという表面的な理解では「天文学史」を十分に把握することはできない。スミスの議論の内実が想像力の分析を中心としていることを見落としてはならないだろう。これは、すぐ見るように、単に理論形成における想像力の重要性をスミスが指摘しているということにとどまらない。驚異や驚愕という感情分析において想像力は不可欠な要素であり、想像力に着目することによってはじめて驚異や驚愕に対するスミスの見解を把握することができると考えられる⁽¹⁰⁾。そこで、想像力に着目しながらスミスが驚異や驚愕をどのように捉えているかを確認していきたい。スミスは、驚異、驚愕、驚嘆を区別しそれぞれについて分析すると述べているものの、驚嘆について個別的な考察を行っておらず、議論の過程で言及しているだけである (Schliesser 2005, 700)。そこで、以下では驚異と驚愕についてのスミスの分析を取り上げて検討する。

驚異と驚愕に対してスミスが最初に与えた定義は、前者が「新しく珍しいもの」によって、後者が「予期せぬもの」引き起こされるということだった。この定義だけでは、驚異と驚愕の違いは明確ではないように思われる。例えば、予期せぬものと新しいもの・珍しいものとの違いはどこにあるのだろうか？ある状況において期待したものと違うものに直面した時、それは予期せぬものであるが同時に新しいもの・珍しいものでもありうる。つまり、「新しく珍しいもの」あるいは「予期せぬもの」によって引き起こされるというスミスの定義は、驚異と驚愕の違いを示すのに十分であるように思われぬ。そこで注目しなければならないのが想像力である。両者の違いはそれぞれの感情における想像力の状態によってよりよく理解することができる。

まず「天文学史」第一節で驚愕についてスミスは説明している。スミスによれば、予見されている対象が現れた時、精神はそれに対して準備をしているため精神的な状態はわずかしか変化せず、その対象が引き起こす感情は徐々にそして容易に精神に入り込む (*Astronomy* I. 1/8-9頁)。これに対して予期せぬものが現れた時、対象が引き起こす情念は突然精神に流れ込み、精神は激しい情念のうちに飲み込まれる (*Astronomy* I. 2/9頁)。この時「想像力全体の構造」 (*Astronomy* I. 2/9頁) は混乱した状態に陥る。こうした観察を踏まえ、「何らかの感情が精神に突然もたらされた時に、精神に与えられる激しく唐突な変化が驚愕の本性的全体を構成する」 (*Astronomy* I. 5/10頁) とスミスは主張する。つまり、驚愕にとって本質的なのは、「予期せぬものによって引き起こされる」ということよりも、むしろ精神に与えられる唐突な激しい感情の変化であり、それが引き

起こす想像力の混乱である。

それでは驚異についてはどのように考えるべきだろうか。続く「天文学史」第二節で驚異についてスミスは考察している。スミスによれば、異なる対象間に何らかの類似性を認めることで精神は快楽を感じ、類似性を見出すことで様々な対象の観念を精神は固有の分類に入れて整理していく (*Astronomy* II. 1/14頁)。要するに、観察された対象がなんであれ、それをある種類や分類に関連づけることを人は好むとスミスは考える (*Astronomy* II. 1/14頁)。だが、新しく珍しいものに直面した時、それまでに経験した対象との類似性を見つけないため分類をすることができない。この時の精神状態についてスミスは次のように述べる。「想像力と記憶は無駄に努力をして、その新しく珍しいものを配置できるような分類を見つけるために観念のあらゆる分類をいたずらに見てまわる」 (*Astronomy* II. 3/16頁)。このように、想像力はある一つの思考から別の思考へとたえず移動し、その間我々は不確実で未決定の状態に置かれている (*Astronomy* II. 3/16頁)。スミスによれば、こうした想像力の動揺こそが驚異を構成する要素である。スミスは、「驚異と適切に呼ばれるような感情を構成するのは、この動揺と無駄な回想と、それらが引き起こす精神の感情あるいは運動である」 (*Astronomy* II. 3/16頁) と述べている。この驚異を静めるためには、新しく珍しい対象に類似したものを見つけてそれを既存の分類と関連づけたり、場合によっては、新たな分類を作ってそこに配置する必要がある (*Astronomy* II. 3/16頁)。

スミスによれば、何らかの新しく珍しい対象に直面した時にだけ驚異が生じるわけではない。通常ではない仕方で諸事象が連続するような状況に直面した時にも驚異は生じる (*Astronomy* II. 5/18頁)。つまり、予期せぬ一連の事象に直面した時にも驚異は生じるとされる。このことを説明するために、まず観念連合にスミスは言及する。二つの事象が連続して生じるのを頻繁に見ることで、それらの事象に関する観念は想像力のうちで結びつけられるようになり、一方の観念を見ると他方の観念を予期する (*Astronomy* II. 7/18-19頁)。だが、ある事象のあとで見慣れた別の事象ではなく予期せぬ事象が続いて生じるのを見る時、この「慣習的結合」 (*Astronomy* II. 8/19頁) が妨げられる。その際、それまでスムーズに事象間を移動していた想像力の動きは中断され、想像力は一つの事象と別の事象との間に大きな隔たりがあるように感じる (*Astronomy* II. 8/20頁)。この時にも驚異が生じ、スミスはこれを二つ目の種類の驚異とする (*Astronomy* II. 8-9/20-21頁)。スミスによれば、「そこで想像力の進路にもたらされる中断と、そのように分断した諸対象に沿って通る際に想像力が見出す困難と、それらの対象の間の切れ間あるいは隔たりのようなものについての感じがこの「驚異という」感情の本質全体を構成している」 (*Astronomy* II. 9/21頁)。この種の驚異は、想像力の移動が困難な諸事象の間に「中間的事象という結合的鎖 (a connecting chain of intermediate events)」 (*Astronomy* II. 9/21頁) を想定することによって解消される。

スミスはこのように、新しく珍しい対象に直面した場合と、新しく珍しい諸事象の継起に直面した場合に驚異が生じることを述べているが、スミスが意味しているのは感じ方の異なる二種類の驚異があるということではなく、区別できる二つの場合に驚異という同一の感情が引き起こされるということだろう。そして二つの事例における驚異の説明から、スミスがそれを想像力の状態によって特徴づけていることを明確に理解することができる。具体的に述べると、想像力が不確実で未決定な状態に置かれていることが驚異という感情の本質的な特徴だと考えられるのである。新しく珍しい対象に直面した時の想像力の状態は、その対象をどれかに分類しようとして絶え間なく動き回るといったものであった。そして、ある分類との類似性を見つけたり、新たな分類

をその対象のために設定することで驚異は静められるとされていたので、想像力がある対象をどのように扱うべきか分からず、未決定な状態にある時に驚異という感情が生じていることになる。また、新たな珍しい継起に直面した時の想像力は、ある事象から別の事象に移行する際に隔たりを感じ、その移動に困難を感じているとされていた。これは、事象間の移動にためらいを感じ、どのように移動するべきかという点で未決定な状態に想像力が置かれていることを意味していると言えるだろう。実際スミスは、現象の奇妙さや珍しさは「驚異と不確実さ」(*Astronomy* IV. 32/63頁)を引き起こすと考えている。そうであるならば、スミスによる驚異の説明は、想像力の状態によって理解することができる。

想像力の状態に着目し驚愕と驚異を整理すると次のようになるだろう。驚愕は突然の変化による想像力の動揺あるいは混乱によって引き起こされ、驚異は想像力が不確実で未決定な状態にあることで引き起こされる。通常とは異なる事象の継起に直面した時の精神状態に関する次のスミスの記述がこの解釈の妥当性を示している。

ある見慣れた対象が別の対象の後に現れ、通常はその対象の後には現れない時、その見慣れた対象は最初に意外性によって驚愕と適切に呼ばれるような感情を引き起こし、その後で継起あるいは出現の順序の異常さによって驚異と適切に呼ばれるような感情を引き起こす。我々は、それがそこにあるのを感じて、ぎくっとして驚愕し、そしてそこからどのようにしてそれがここに来たのかと驚異を感じる。(*Astronomy* II. 6/18頁)

この箇所では重要なのは、精神が経験する感情の一連の過程として驚愕と驚異が描かれていることである。通常とは異なる事象の継起に直面した時、その意外性から「最初に (first)」驚愕が生じ、「その後で (afterwards)」どうしてそのようなことが生じたのかと驚異を感じるとスミスは述べている。これは、上で示した驚愕・驚異の解釈と対応する。つまり、最初意外性から想像力は揺さぶられ動揺し混乱した状態に陥る。とはいえ、驚愕はそれが生じた瞬間に最大だと考えられるのであり、時間がたてば想像力の動揺は徐々に落ち着くだろう。だが驚愕が落ち着いたとしても、想像力は次に通常とは違う事象の継起に困難を感じる。つまり、どのように移動すればいいか戸惑いを感じ未決定で不確実な状態に想像力は置かれ、驚異という感情が生じる。想像力に対するスミスの見解を踏まえることで、上の引用で述べられている一連の過程を十分に理解することができるのである。

2.2. 哲学的探究としての天文学の歴史

ここまで、驚愕と驚異に関するスミスの感情分析を見てきたが、次にそれらの感情をスミスがどのように哲学的探究と関連づけているかを考察しよう。哲学的探究の原理という「天文学史」の主題と最も密接に関係するのは、通常とは異なる事象の継起の認識によって引き起こされる驚異である。というのも、スミスは、そのような驚異を静めるために必要とされる中間的事象の発見こそ哲学という知的活動に他ならないと考えているからである。「哲学とは、自然の結合的原理の科学」(*Astronomy* II. 12/25頁)だとスミスは主張するのである。より具体的に言うと「自然の多様な現象を結びつけるような隠された結合を明らかにしようとする」(*Astronomy* III. 3/32頁)のが哲学だとされている。この点に関していくつか解釈を加えながらスミスの意図を明確にした

い。

まず、スミスの議論において重要となるような中間的事象とは、新たな事象の発見というよりも⁽¹¹⁾、ある事象の継起を説明するような仮説のことだと言える。スミスはこの中間的事象を「目に見えない」(*Astronomy* II. 12/26頁)ものとして捉えている。そして、この説明的仮説としての中間的事象は、事象の継起を完全に満足のいく仕方で説明することができないとしても、不完全な仕方であれ驚異を静めるのに役立つとされる(*Astronomy* II. 9/21-22頁)。ここでもスミスが挙げている例を確認しておきたい。ある小さな鉄片に磁石を近づけて、磁石が直接的な衝撃を与えていないのに、磁石の動きに合わせて鉄片が動くのを最初に見た人は驚愕と驚異を感じるだろう(*Astronomy* II. 6/18頁)。だが、スミスによれば、我々がデカルトの考えにしたがって磁石の周りを「目に見えない微粒子」(*Astronomy* II. 8/20頁)が回転しており、その衝撃によって鉄片が押し進められていると想像するならば、磁石の運動とそれに続く鉄片の運動という二つの事象の間を移動することに想像力は困難を感じなくなる。このデカルト的「仮説」(*Astronomy* II. 8/20頁)という中間的事象の発見によって想像力はより滑らかに事象間を移動することができるようになるとスミスは考える。

次に、これまでの考察から理解できるように、スミスは哲学的探究の原動力を驚異という感情に認めている(*Astronomy* II. 8/19-21頁)。つまり、中間的事象によって混乱して見える現象に秩序をもたらすことで、想像力が感じる困難さや不安を除去し、心に平静を取り戻すことこそ、哲学が第一に目指していることだとされるのである⁽¹²⁾。「天文学史」の主題を考慮に入れるならば、このように哲学的探究を人間の心理的要因から説明している点が「天文学史」の最大の特徴と言える。こうしてスミスは驚きに関する感情分析を哲学的探究へと接続する。

以上のようなスミスの見解を例証する位置づけにあるのが天文学の歴史に関する叙述である。スミスは、哲学の起源にさかのぼり、そこから頂点とされているところに至るまでの過程を検討すると明言している(*Astronomy* II. 12/26頁)。その際、スミスは自身の主張する観点から天文学理論の歴史を分析すると述べる。その観点とは、「それぞれの理論体系が想像力を落ち着かせるのにどの程度適したものであったか、そして自然という劇場を、さもなければそのように見えていたよりもまとまったものとして、したがってより壮麗な光景とするのにどの程度適したものであったか」(*Astronomy* II. 12/26頁)というものである。スミスによれば、哲学的探究は想像力が不確実で不決定的な状態に置かれることで生じる驚異によって引き起こされ、想像力の移動をより容易なものにするために要請されるため、スミスの見解が正しければ、想像力を落ち着かせるのに適した哲学的理論が広く受け入れられてきたということになる。この点を例証することが、天文学の歴史に関する叙述の意図である。実際スミスは、哲学的理論が想像力を落ち着かせることに成功したか失敗したかに応じて名声や評判を獲得するのに成功したり失敗してきたと考えている(*Astronomy* II. 12/26-27頁)。以上のような点を念頭に置きながら、スミスはエウドクソスから始まりニュートンに至るまでの歴史を叙述している。

2.3. 「天文学史」における経験・観察の重要性と少数の説明原理を志向する人間の傾向性

スミスの方法論を直接的に読み込む対象として「天文学史」を扱うことには慎重になるべきであるが、哲学的理論の形成・発展について述べている点や「天文学史」を生涯のうちで長く保持し続けてきたという点を踏まえるのであれば、「天文学史」での議論がスミス自身の理論形成に

全く影響を与えなかったということも考えにくい。そこで本節の最後に、スミスが自身で理論を構築する際にどのような点に留意したと考えられるかを考察したい。ここで特に注目したいのは、科学理論の移行⁽¹³⁾に関するスミスの見解である。なぜなら、そうした変化に関する記述において、より広く受容されるような哲学的理論に対するスミスの見解を読み取ることが可能だからである。

天文学の歴史に関する叙述では、天文学理論の変遷・移行過程が一つの重要な要素となっている。天文学の歴史の大きな流れとしては、最初にアリストテレスらの同心天球の理論があり、その後プトレマイオスを代表とする離心天球に理論枠組みが移行し、プトレマイオスの体系に対してコペルニクスが別の理論を提示し、ケプラーがそれを修正したとされる。そして、コペルニクスの体系はすぐには受け入れられなかったものの、それが持つ問題点はデカルトそして最終的にはニュートンの理論によって取り除かれることになったとされている。こうした理論的移行はどのような状況で生じるとスミスは考えていたのだろうか。

まず、感情分析が「天文学史」の根底にあることから理解できるように、想像力の不安を取り除くのにより適した理論が受容されるとスミスは考えている。スミスの記述を見る限り、いくつかの要素がこの点に関係している。(1) まず、哲学的理論は何よりも想像力の移行を可能にするような中間的事象を提示するものでなければならぬだろう。つまり、哲学的理論は諸事象をつなぐ鎖を提供することによって一見混乱して無秩序に見える現象を「一様でまとまった」(*Astronomy* IV. 8/42頁)ものとして眺めることを可能にしなければならない(*Astronomy* IV. 7/41-42頁)。というのも、そうでなければ哲学的探究へと人を駆り立てる驚異を静めることは出来ないからである。そのように天体現象をまとまった仕方で提示するような理論的体系を「美しい」とスミスは表現する(*Astronomy* IV. 32-33/62-63頁)。(2) さらに、想像力は長い推論に困難を感じるため(*Astronomy* II. 10/22頁)、哲学的理論は簡潔なものの方が想像力にとって好ましい(*Astronomy* IV. 19, 25, 27-28, 32/51-52頁, 55-56頁, 57-58頁, 62-63頁)。この典型例は同心天球の体系から離心天球の体系への移行に見られ、同心天球の体系が新たに発見される天体現象を説明するために徐々に複雑になった後で、それらをより簡潔に説明する離心天球の体系へと移行したとスミスは説明している(*Astronomy* IV. 8-13/42-46頁)。(3) 加えて、諸事象を結びつける鎖それ自体が想像力に馴染みがあったりなかったりするとスミスは考えている。例えばスミスは、天体の運動を説明する際にデカルトは想像力に最も馴染みある衝撃の法則に依拠し、ニュートンはその次に馴染み深い結合原理である引力の法則に基づいて理論を構築したと述べている(*Astronomy* IV. 67/93頁)。(4) また最後に、理論体系が提供するものの見方それ自体の新しさや意外性が人々の驚異と驚愕を引き起こし、そのことが理論体系に対する人々の愛着を強めることもあるとスミスは認めている(*Astronomy* IV. 33/63頁)。

以上のように、想像力の性質に適うような理論が受け入れられてきたという見解をスミスは保持している。スミスが主張しているのは、どれほど観察される事実と対応しているか、あるいはどれほど簡単な理論か、あるいは想像力にとってどれほど馴染みあるものか、あるいはどれほど簡単に思いつくことができるものか、など多様な要素の絡み合いとして科学理論が変遷してきたということだろう。これらの要素の中で強調しておきたいのは、哲学的理論が前提として驚異を静めるものでなければならず、観察される諸事象を説明することができるものでなければならぬという点である。例えばスミスは、天体現象をより簡潔な原理によって説明する理論への移行

があることを認める一方で、理論体系が観察された事象と対応していることの重要性を絶えず指摘している (*Astronomy* IV. 16, 25-27, 30-31, 76/49-50頁, 55-57頁, 59-62頁, 101-103頁)。つまり、より簡潔な理論が形成された時だけでなく、既存の理論体系では十分に説明することができないような現象が観察された時にも理論枠組みの移行が生じるとスミスは考えていた⁽¹⁴⁾。ある理論が想像力の性質にどれほどかなっていても、観察された事実に適合しなければその理論は拒絶されるとスミスは考えていたのである (Campbell 1971, 41)⁽¹⁵⁾。

さて、これまでの考察から理解できるように、天文学に関する理論の変遷を検討する中でスミスは、理論形成における経験的事実の重要性と、簡潔な理論を好む人間の傾向性という二つの要素を扱っている。この二点は、前節で見た『感情論』第七部の議論から読み取られたものに対応していると考えられる。そこでスミスは、説明原理を最小限にしようとする人間の傾向性にあまりに「熱中した」(TMS VII. 2. 14/下195頁) ためエピクロスが重要な道徳的経験を無視することになったと述べていた。このスミスの主張は「天文学史」の議論と両立すると言えるだろう。「天文学史」でスミスは、より広く受け入れられる哲学的理論の特徴を想像力の分析を通じて明らかにしたが、重要な論点は、さまざまな要因が理論的移行には伴うということであった。つまり、簡潔さは理論が持ちうる一つの利点であるが、それは一つの利点でしかない。そもそも哲学的探究を引き起こす驚異についての見解を踏まえるならば、観察や経験された事実に理論が基づいていることが極めて重要な要素であるのは明らかである。このように、スミスによるエピクロス批判は、「天文学史」において利点を認められている理論に関するスミスの見解と両立する。

さて、本節では「天文学史」の分析を通じて、経験的事実の重要性と簡潔な原理を好む人間の傾向という二つの要素をスミスが認識していたことを読み取ってきた。そのため本節の分析は、前節で提示した解釈の妥当性を傍証している。だが、『感情論』と「天文学史」の議論が正確に一致するというわけでもない。例えば、『感情論』第七部では、説明原理を可能な限り少なくしようとする人間の傾向が経験的証拠を無視することにつながると論じられていた。つまり、「天文学史」では説明原理を少なくしようとする人間の傾向性と経験に即した理論構築という二つの要素が並列するような仕方で論じられているのに対して、『感情論』ではそれら是对立するような仕方で提示されている。ここに「天文学史」と『感情論』の間の一つの相違を認めることができるだろう。したがって、スミス自身可能な限り簡潔な理論を形成しようとしていた可能性はあるものの、その危険性を認識している『感情論』では経験的証拠を軽視することがないように慎重になっていると考えることが可能である。以上で明らかにした経験の重視、簡潔性を志向する人間の性向に対する認識という点は必ずしもスミス独自のものとは言えない。なぜなら次節で見られるように同様の点をハチスンも明確に論じているからである。次節ではこの点に関するハチスンとスミスとの類似性を明らかにしていく。

3. ハチスンの美的感覚について

ハチスンが、スミスと同様に経験や観察を道徳理論構築の際に重視していたことは明らかであるように思われる。例えば、ハチスンは『体系』の冒頭で「超自然的な啓示のいかなる助けもなしに、観察と自然の構造から発見される結論」(*System* I, 1) に依拠して道徳理論を展開すると明確に述べている。これと同様の見解は『要綱』(*Institutio*, 24/17-18頁) でも述べられている。

実際、ハチスンも議論の中で日常的事例に言及したり、我々の経験にうったえるような仕方で議論を展開している。そこで、スミスとの関係でより重要となるのは、簡潔な説明原理を好む人間の傾向性の方であろう。ハチスンはこれと同様の性向を美的感覚として論じている。以下ではこのことを明らかにしていきたい。

『探究』は、道徳感覚 (moral sense) というハチスン独自の発想が理論的に展開されていることによって特に知られている。しかし、『探究』は二つの論文から構成されており、本節では、美的感覚についてハチスンが詳細に扱っている第一論文に着目する。『探究』でのハチスンの大きな問題意識は感覚的快樂について十分な検討がなされていないということである (*Inquiry* original preface, pp. 7-8/11-13頁)。ハチスンは、外的感覚とは異なる対象から、しかし外的感覚と同じように意志とは独立して直接的に快樂や苦痛を受け取るような、より上位の能力が人間に備わっていることを示そうとする。それらの能力としてハチスンが考えているのが、内的感覚 (Internal Sense) と道徳感覚 (Moral Sense) である (*Inquiry* original preface, pp. 8-9/13頁)。本節で考察したいのは前者の内的感覚であり、ハチスンはその感覚を、美を知覚する能力として論じている。

内的感覚は「美的感覚 (Sense of Beauty)」 (*Inquiry* I. I. IX/29頁) とも呼ばれており、ある対象についての複雑観念から快樂を得るような感覚のこととされている (*Inquiry* I. I. VIII/28頁)。例えば、音の調和や絵画などの複合観念から美という観念を受け取るのは美的感覚によってであるとハチスンは考える (*Inquiry* I. I. IX/29頁)。この美という観念は対象に内在する性質ではなく美的感覚によって精神内に引き起こされる知覚だという見解をハチスンは持っているが (*Inquiry* I. I. XVII/34頁)、そうした美の観念を引き起こす対象には共通した性質があることを指摘する。それは、「多様性の中の均一性 (Uniformity amidst Variety)」 (*Inquiry* I. II. III/36頁) である。

ハチスンによれば、「多様性の中の均一性」から人は美の知覚を感じる。このことを示すためにハチスンは図形の形を思い浮かべてそれを修正させていくという思考実験を行う (*Inquiry* I. II. III/36-37頁)。まず、均一性をある程度一定のものと想定して多様性を増加させた場合、多様性が増えるほど対象は美しく見えるとハチスンは主張する。例えば、正三角形よりも正方形の方が美しく、正方形よりも正五角形の方が美しくと感じるだろうとハチスンは述べるのである。次に多様性を一定にして均一性を高めた場合に、より均一なものに人は美を感じるだろうと述べる。例えば、辺の長さがばらばらな三角形よりも、二等辺三角形あるいは正三角形の方が美しく見えるとハチスンは述べる。このように、多様性と均一性が多ければ多いほど対象は美しく見えるとハチスンは主張する。ハチスンは「多様性の中の均一性」という性質を図形だけではなく、あらゆる美しい対象が持つ性質として理解しているため、この点を例証するために様々な自然的対象にも言及をしている。例えば、天体現象は規則的でありかつ多様性に満ちており (*Inquiry* I. II. V/38-39頁)、地上に目を向ければ成長と繁殖という仕方で均一性を持った多様な植物で溢れている (*Inquiry* I. II. VII/39-40頁)。このようにハチスンは「多様性の中の均一性」という性質が美の観念を引き起こすことを論じる。

同様のことに基づいて、ハチスンは定理や普遍的真理に対して人が感じる美も説明する。つまり、それらの定理や真理も「均一性を伴った多様性 (variety with uniformity)」 (*Inquiry* I. III. I/45頁) を持っているため美しく見えるとハチスンは考える。例えば、数学的定理は「最大の正

確な一致を伴った無数の個別的真理」(*Inquiry* I. III. II/45頁)を含んでおり、「一般的定理における無限の対象のこの一致ないし統一性がそれらの発見に伴う美ないし快樂の源泉」(*Inquiry* I. III. III/46頁)だとされている。このように述べる時にハチスンの念頭にあるのは、例えばユークリッド原論の第一巻命題47⁽¹⁶⁾のようなものであり、ハチスンはその命題があらゆる多様な直角三角形を含み込むような均一性を伴った命題だと考えている(*Inquiry* I. III. II/45-46頁)。つまり、ある数学的命題は多様な対象に対して普遍的に適用されることから、「均一性を伴った多様性」を持つと考えられているのである。ただ、ハチスは数学的定理にのみ美の源泉を認めているわけではない。あらゆる研究において、多様な現象を説明することができる一般の原理が同じように美の源泉になると述べており、例えば「アイザック・ニュートン卿の体系における引力作用はそのようなもの」(*Inquiry* I. III. V/48頁)の一つとされている。

定理や普遍的原理に美の源泉を認めるようなハチスンの議論には、スミスの「天文学史」の議論に通じる点がいくつかある。まず、理論体系が美的な感覚によって判断されているという点でハチスンとスミスは共通している。スミスはハチスンのように美的感覚によって「天文学史」を展開していたわけではないが、一見分断して見える諸現象をまとめた仕方で提示して驚異を静めるような理論体系を「美しい仕組み」(*Astronomy* IV. 32/62頁)と表現していた。スミスにおいて知的活動と美的判断は密接に関連しているのである(Campbell 1971, 41; Skinner 1974, 179; 只腰 1995, 153-154頁)。さらにハチスは、美的感覚を通じてある知的体系から受け取る快樂が、その理論がもたらすような何らかの利点(advantage)への見通しとは別のものであるばかりか、美的判断を下す際に通常そのような利点を我々は意識していないと考えている(*Inquiry* I. I. XV/33頁; I. III. V/48-49頁)。これは、哲学的探究が有用性の認識ではなく、何よりも想像力の特定の状態から生じる驚異に由来するというスミスの見解に通じる。加えて、理論体系そのものが珍しいものであることによってその理論の魅力を増加させるという点でもハチスンとスミスの見解は類似している。スミスは、ある理論体系が提供するような自然に対する見方の「奇抜さや意外性(novelty and unexpectedness)」(*Astronomy* IV. 33/63頁)がその理論に魅力を与えていたが、ハチスンも通常では思いつかれないような命題の発見が「奇抜さ(novelty)」(*Inquiry* I. III. IV)のために「驚愕(surprise)」(*Inquiry* I. III. IV)を引き起こすことで新たな魅力を獲得すると考えている⁽¹⁷⁾。スミスの「天文学史」がハチスンの美的感覚との関係で考察されることはほとんどないが、以上のような類似性を踏まえた場合には「天文学史」形成の際にハチスンの思想がスミスに流れ込んでいるという可能性は十分にありうるだろう⁽¹⁸⁾。

さらに注目したいのが、美的感覚が理論形成の際に問題を引き起こすことがあるとハチスンが認識していたことである。ハチスは、美的感覚にふけるあまり不合理な仕方で人は演繹を行うことがあると考えていた。

この美的感覚と美を獲得しようとする愚かな性向に導かれて、数学と同様に他の科学においても、どのような馬鹿げた試みに人々が向かっていったかを見ることは同じように容易である。ある一つの命題すなわち、「私は考える。それゆえ私はいる。」という命題からあらゆる人間の知識を演繹するという野心的な試みにデカルトを向かわせたのはおそらくこれ〔美的感覚〕である。(*Inquiry* I. III. V/49頁)

デカルトの理論の具体的な問題点をハチスンは説明していないため、彼がデカルトのどの議論を念頭においていたかは不確かである。だが、「愚かな (silly)」や「馬鹿げた (absurd)」といった表現からハチスンがデカルトを批判していることは明らかであり、文脈を踏まえるならば、美の源泉である均一性を追求するあまり、ある原理から説明することができないようなことも説明しようとしていたという点でデカルトを批判していると考えられることができるだろう。デカルトは「均一性へのこの愛の不都合さ」(*Inquiry* I. III. V/49頁)の一例でしかなく、他にもライプニッツやプーフェンドルフにハチスンは言及している。これらの議論における大きなハチスンの意図は、人間に美的感覚が備わっているということであるが、スミスと同様にハチスンはその感覚が持つ問題点を同時に認識していたのである (*Inquiry* I. III. V/48-49頁)⁽¹⁹⁾。

以上の考察から、(1) 道徳理論構築における道徳的経験の重要性に対する認識、そして(2) 簡潔な説明原理を好む人間の性向が理論構築の際にもつ危険性に対する認識という二点において明確にスミスとハチスンとの間に類似性を見ることが可能である⁽²⁰⁾。

結び

本稿では、通常着目されることがない側面からハチスンとスミスとの間にある類似性を明らかにすることを目的とし議論を展開してきた。本稿第一節と第二節では、スミスに関する考察を行い、スミスが道徳的経験を重視していたこと、そしてそうした経験に即した理論構築を行う際に簡潔な説明原理を好む傾向性が妨げになりうると認識していたことを明らかにした。続く第三節ではハチスンに関する考察を行い、ハチスンが道徳理論を経験に基礎付けようとしていたこと、そして、美的感覚という人間の本性的能力がより簡潔な原理を好むように人を促し、それが不合理な理論の構築へとつながりうるとハチスンが認識していたことを明らかにした。これらの議論を通じて、ハチスンとスミスとが、道徳的経験の重視という基本的姿勢を共有しつつ、同時に、簡潔性を志向する人間の傾向性が伴う危険性を共に認識していたことを示した。

最後に今後の展望として、本稿で論じられたことがどのような含意を持ちうるのかということについて一つの見通しを提示し、本論文を終えたい。本稿冒頭では『感情論』第七部の分析を行い、先行する道徳理論に対してスミスがどのように批判的考察を行なっているかを見た。そこでは同様な仕方でハチスンの理論も批判対象となっている。例えば、徳の本質を仁愛に認めるような理論を提示した思想家の中でも特に優れた存在としてスミスはハチスンを認めているが (TMS VII. ii. 3. 3/下299頁)、二つの点に関してスミスはハチスンを批判している。

第一に、ハチスンは有徳な行為の動機として自己愛を全く認めず、自己是認の快樂すらも有徳な行為の動機にはならないと主張しているが、これは一般的な道徳的経験に反するとスミスは考えている (TMS VII. ii. 3. 13/下305-306頁)。そして第二に、ハチスンの理論体系では慎慮という自己への配慮に優れた徳を説明することができないとスミスは述べる (TMS VII. ii. 3. 15/下306-307頁)。これらの議論においてスミスは、自己是認が一般的に有徳な動機として見なされているという道徳的経験に言及し、さらに慎慮などの徳が一般的に道徳的に是認されていると述べている。これらのことは、ハチスンの道徳理論が正確に道徳的経験に即したものとはなっていないとスミスが考えていたことを示唆しているだろう。

以上を本稿で明らかにされた点と合わせて考えると、次のように推測することが可能ではない

だろうか。それは、ハチスンが自分で認識していた美的感覚の問題点にとらわれているとスミスが考えていたこと、したがって、道徳的経験により注意を払っている点でハチスンよりも優れた経験的理論を構築したとスミスが考えていたことである。換言すると、実際の経験や観察される事実を理論形成の際に歪めたり軽視しているという点から見れば、スミスにとってハチスンの経験的分析は徹底したものではなかったと考えることが可能ではないだろうか。こうした見通しに関する詳しい論証は別校にて試みたいと思う。

注

- (1) 第四版でのタイトルは、「道徳感情論あるいは、最初に隣人の、その後で自分自身の行為と性格について、人が自然に判断する諸原理の分析を目指した試論」である。
- (2) ハチスンの死後出版された『道徳哲学体系』〔以下『体系』〕(1755)をスミスは購入していたということも言われている (Ross 2010, 50/58頁)。
- (3) Forbes (1982)、Haakonssen (1996)、田中 (2003)、新村 (1994)らの研究はハチスンやスミスを自然法思想の文脈から考察しており、より政治理論に強調点を置いたものとしては Winch (1978)の研究などがある。自然法思想に対する研究が活発化した背景には、HontとIgnatieff(1983)による論集がシヴィック・ヒューマニズム的文脈と自然法思想的文脈に対する関心を高めたことがあると言えるだろう。
- (4) こうした側面からスミスの理論を分析した主要な研究としては、Campbell (1971; 1975; 2013)による一連の研究がある。また、道徳哲学への経験的方法の適用に関しては、当時の自然科学の影響があるということ、とりわけ自然科学的方法を道徳哲学に適用すべきだというニュートンの提案がスミスを含めたスコットランド啓蒙思想家に影響を与えていたということが論じられている (Berry 2006; 2015; Campbell 1971; Emerson 1990; Montes 2013)。なお、スコットランド啓蒙における社会科学と現代的な社会科学の両者ともに経験主義を重視しているとはいえ、経験的分析と規範的主張が密接に結びついている点で前者が後者とは異なることを見落としてはならないと強調する論者もある (Hanley 2009)。
- (5) 徳や悪徳の間に実質的な区別を認めない学説を四つ目のものとして捉え、ここでは「四種類」と述べている。
- (6) こうした見解は、C. Smith (2018)と基本的な立場を共有するものである。なお内田 (1994)は「綜合者スミス」(内田 1994, 267頁)と述べることによって以上で提示したような見解が『感情論』だけでなく『国富論』にも通底しているということを示唆しているが、特にこの点について詳細に分析をしているわけではない。
- (7) スミスが生涯で出版した著作は『道徳感情論』と『国富論』だけであるが、これら以外にスミスの思想を把握する際に参照することができる資料としては『法学講義』(1762-64)や『修辞学・文学講義』(1762-63)などがある。『哲学論文集』はそうした資料の一つと見なされるが、『法学講義』や『修辞学・文学講義』とは重要な点で異なる。それは、『法学講義』や『修辞学・文学講義』がスミスの教授時代の講義に関する学生のノートから構成されているのに対して、『哲学論文集』はスミス自身が出版を許可したものだということである (cf. CAS 137)。このような事情を考慮した場合、『法学講義』や『修辞学・文学講義』への参照についてはある程度慎重になる必要がある (Griswold 1999, 29; 福鎌 1984, 109頁)。スミスが死の直前に未完成の原稿を焼き捨ててしまったことはスミス研究者の間では周知であるが、そうであるならばスミス自身が出版を許可した『哲学論文集』の重要性はより明瞭になるだろう。「天文学史」の明確な執筆時期は明らかではないものの、少なくともオックスフォード大学時代 (1740-1746)に遡ると推察されている (EPS intro. p.

- 7; C. Smith 2016, 91)。また彗星に関する記述 (*Astronomy* IV. 74/100頁) から「天文学史」のテキスト自体は1758年以前に書かれたものだと推測されている (Ross 2010, 97/112頁)。なお、『哲学論文集』の内容がスミスの思想全体のうちでどのように位置づけられるのかという点に関しては、グラスゴー全集版の解説や Griswold (1999)、C. Smith (2016) などを参照。
- (8) 「哲学的探究を導き指導する原理」に関する論文は「天文学史」以外に二つあり、それらはそれぞれ「古代物理学の歴史」と「古代論理学と古代形而上学の歴史」を例証としながら論じたものである。それらの中で「天文学史」が内容の上で最も充実している (C. Smith 2016, 97-98)。
- (9) 例えば Skinner (1979) は「天文学史」からスミスの方法論を読み取り、それが『感情論』、『法学講義』、『国富論』に通底しているという解釈を提示している。また、田中 (2017, 215-216頁) も「天文学史」に見られるスミスの方法論をニュートンの方法として解釈し、それがアリストテレスの認識論に通じるものとした上で、その方法論が『感情論』に適用されていると考えている。
- (10) 例えば只腰 (1995) は「スミスの知識論においては、人間を哲学に導く感情としての驚異と、人間精神の一機能としての想像力は密接な関係を持っている」(只腰 1995, 108頁) としつつ、「スミスの学問体系にあって想像力は、道徳判断においてと知的認識においてと、2つの機能次元をもっている」(只腰 1995: 108頁) と述べることによって、驚異という感情と知的認識能力としての想像力を切り離している。また、生越 (1997, 52-54頁) は驚愕や驚異を説明する際に、それらの感情と想像力の状態の対応関係を取り立てて強調しておらず、どちらかと言えばロック的な不安との関連を強調している。しかし、以下で述べるようにスミスによる驚異と驚愕の定義において想像力は不可欠な要素である。また、このように想像力の役割を強調する点で本節の議論は、「天文学史」のみならずスミスの思想全体における想像力の重要性を主張する Griswold (2006) の見解に通じる点がある。
- (11) 確かに、ある事象と別の事象の間に隔たりを感じても、その間に何らかの事象を発見することによって隔たりを感じなくなるというような例をスミスはいくつか挙げている。例えば、オペラ劇場の仕組みに驚異を感じていたとしてもその舞台裏を見れば驚異を感じなくなるだろうとスミスは述べている (*Astronomy* II. 9 /21頁)。だが、天文学史の記述を見る限り重要となるのは目に見えない中間的事象の想定だと考えられる。このことは、天文学の歴史に関する叙述からも理解できる。例えば、天文学の歴史に見られる説明原理を「想像上の機械」(*Astronomy* IV. 19/51頁) とスミスは呼んでいる。
- (12) したがって、スミスは哲学(科学)が有用性の認識に基づいて展開されてきたわけでは必ずしもないと考えている (*Astronomy* II. 12/25-28頁)。この点に関連して Thomson (1965) や生越 (1997) が指摘するように「天文学史」での有用性の扱いを『感情論』の議論と関連させて理解することは可能であろう。
- (13) 「天文学史」での科学理論の発展過程に関する説明などには、トマス・クーンの科学論と通じる点があることがたびたび指摘されている (EPS general introduction, p. 15; C. Smith 2016, 101; Schliesser 2005, 704; Skinner 1974, 180)。
- (14) とはいえコペルニクスの事例の場合に明白なように、一つの理論体系から別の理論体系への移行が必ずしもスムーズに行われるとスミスは考えていなかった。人々の「自然的偏見」(*Astronomy* IV. 38/66頁) や既存の理論体系への「愛着」(*Astronomy* IV. 76/102頁) などがある理論体系から別の体系へのスムーズな移行を妨げるとスミスは考えていた。
- (15) 同様の論点として、哲学的探究が驚異という感情に由来するとしても、哲学的理論が感情や情念に対する恣意的なうったえによって受け入れられるとスミスが考えていなかったということについて Schliesser (2005) は詳細に論じている。Schliesser (2005) の念頭にあるのは、例えば理論的仮説を想像力の産物とし

ている点でスミスの議論には科学理論に対する懐疑的な側面があり、それは主にヒュームに由来しているというような見解であろう (Ross 2010, 97-98/110-113頁)。

- (16) 第一巻の命題47は、「直角三角形において直角の対辺の上の正方形は直角をはさむ2辺の上の正方形の和に等しい」(*Euclidis Elementa* 1.47) である。
- (17) ここで参照している箇所は『探究』第二版以降に追加されたものである。
- (18) このことを考えるにあたって「天文学史」がオックスフォード留学時代 (1740-1746) の初期のスミスの思想を含んだものであるという点を加味しておく必要があるだろう。確かにヒュームが『道徳原理研究』(1751) で、エピクロス主義者あるいはホッブズ主義者は友情などを自己愛に還元していると述べている時に (EPM appendix 2.4/170-171頁)、スミスと同様の論点をヒュームが論じているように見える。しかし、スミスが「天文学史」にとりかかったと想定される時期やここでの考察を踏まえるとハチスンからスミスがより直接的に影響を受けていたと推測することも可能となるだろう。
- (19) 只腰 (1998) は、ロック的経験論を大きな背景としながら、ハチスンの美的感覚とスミスの科学認識の間に連続性があることを指摘している。しかし、本稿で示したようにハチスンの美的感覚とスミスの見解には、只腰が指摘するより多くの類似点や共通性が存在している。
- (20) この結論は、スミスやハチスンが簡潔な説明原理によって理論を構築することを完全に避けていたということの意味するわけではない。例えば両者がニュートンの理論に言及している際には、総じて肯定的な評価を下していると言えるだろう。また、「天文学史」の議論を踏まえた場合に、スミスが道徳的経験に十分な注意を払いつつ、同時に簡潔な理論を構築しようとしていたと想定することは十分可能である。しかし、この点はスミスによるニュートン受容という別の論点にも関係すると考えられ、本稿の主題とは異なる問題であるためここで論じることはしない。

参考文献

外国語文献

- Berry, Christopher J. 2006. 'Smith and Science.' *The Cambridge Companion to Adam Smith*. K. Haakonssen, ed. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 112-135.
- 2015. 'The Rise of the Human Sciences.' *Scottish Philosophy in the Eighteenth Century: Morals, Politics, Art, Religion*. A. Garrett and J. A. Harris, eds. Oxford: Oxford University Press, pp. 283-322.
- Campbell, Tom D. 1971. *Adam Smith's Science of Morals*. London: Allen & Unwin.
- 1975. 'Scientific Explanation and Ethical Justification in the *Moral Sentiments*.' *Essays on Adam Smith*. A. S. Skinner and T. Wilson, eds. Oxford: Clarendon Press, pp. 68-82.
- 2013. 'Adam Smith: Methods, Morals, and Markets.' *The Oxford Handbook of Adam Smith*. C. J. Berry, C. Smith and M. P. Paganelli, eds. Oxford: Oxford University Press, pp. 559-580.
- Emerson, Roger L. 1990. 'Science and Moral Philosophy in the Scottish Enlightenment.' *Studies in the Philosophy of the Scottish Enlightenment*. M. A. Stewart, ed. Oxford: Clarendon Press, pp. 11-36.
- Forbes, Duncan. 1982. 'Natural Law and the Scottish Enlightenment.' *The Origins and Nature of the Scottish Enlightenment*. R. H. Campbell and A. S. Skinner, eds. Edinburgh: John Donald Publishers, pp. 186-204.
- Griswold, Charles L. 1999. *Adam Smith and the Virtues of Enlightenment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2006. 'Imagination: Morals, Science, and Arts.' *The Cambridge Companion to Adam Smith*. K. Haakonssen, ed. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 22-56.

- Haakonssen, Knud. 1996. *Natural Law and Moral Philosophy: From Grotius to the Scottish Enlightenment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hanley, Ryan P. 2009. 'Social Science and Human Flourishing: The Scottish Enlightenment and Today.' *Journal of Scottish Philosophy*, (7)1: 29-46.
- Heiberg, Johan L. (ed.) 1969. *Euclid's Elementa*. Leipzig: Teubner. [ユークリッド (中村幸四郎・寺阪英孝・伊東俊太郎・池田美恵訳) 『ユークリッド原論 追補版』 共立出版、2011年。]
- Hont, Istvan and Ignatieff, Michael. (eds.) 1983. *Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*. Cambridge: Cambridge University Press. [ホント、I・イグナティエフ、M. 編 (水田洋・杉山忠平監訳) 『富と徳——スコットランド啓蒙における経済学の形成』 未来社、1990年。]
- Hume, David. 1998. *An Enquiry concerning the Principle of Morals*. T. L. Beauchamp, ed. Oxford: Oxford University Press. [D. ヒューム (渡部峻明訳) 『道徳原理の研究』 哲書房、1993年。]
- Hutcheson, Francis. 2004. *An Inquiry into the Original of Our Ideas of Beauty and Virtue in Two Treatises*. W. Leidhold, ed. Indianapolis: Liberty Fund. [フランシス・ハチスン (山田英彦訳) 『美と徳の観念の起原』 玉川大学出版部、1983年。]
- 2007. *Philosophiae Moralis Institutio Compendiaria with A Short Introduction to Moral Philosophy*. L. Turco, ed. Indianapolis: Liberty Fund. [フランシス・ハチスン (田中秀夫・津田耕一訳) 『道徳哲学序説』 京都大学学術出版会、2009年。]
- 2014. *A System of Moral Philosophy in Three Books Vol. I and II*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Montes, Leonidas. 2013. 'Newtonianism and Adam Smith.' *The Oxford Handbook of Adam Smith*. C. J. Berry, C. Smith and M. P. Paganelli, eds. Oxford: Oxford University Press, pp. 36-53.
- Raphael, Daiches D. 1979. 'Adam Smith: Philosophy, Science, and Social Science.' *Philosophers of the Enlightenment*. S. C. Brown, ed. Sussex: Harvester Press, pp. 77-93.
- Ross, Ian S. 2010. *The life of Adam Smith (second edition)*. Oxford: Oxford University Press. [I. S. ロス (篠原久・只腰親和・松原慶子訳) 『アダム・スミス伝』 シュプリンガー・フェアラーク東京、2000年。]
- Schliesser, Eric. 2005. 'Wonder in the face of Scientific Revolutions: Adam Smith on Newton's 'Proof' of Copernicanism.' *British Journal for the History of Philosophy*, (13) 4: 697-732.
- Scott, William R. 1900. *Francis Hutcheson: His Life, Teaching and Position in the History of Philosophy*. New York: A. M. Kelley.
- Skinner, Andrew S. 1974. 'Adam Smith. Science and the Role of the Imagination.' *Hume and the Enlightenment: Essays presented to Ernest Campbell Mossner*. W. B. Todd, ed. Edinburgh: University Press.
- 1979. *A System of Social Science: Papers relating to Adam Smith*. Oxford: Clarendon Press. [A. S. スキナー (田中敏弘訳) 『アダム・スミスの社会科学体系』 未来社、1981年。]
- Smith, Adam. 1976. *The Theory of Moral Sentiments*. D. D. Raphael and A. L. Macfie, eds. Oxford: Oxford University Press. [アダム・スミス (水田洋訳) 『道徳感情論 (上・下)』 岩波書店、2003年。]
- 1977. *The Correspondence of Adam Smith*. E. C. Mossner and I. S. Ross, eds. Oxford: Oxford University Press.
- 1980. *Essays on Philosophical Subjects with Dugald Stewart's Account of Adam Smith*. D. D. Raphael and A. S. Skinner, general eds. Oxford: Oxford University Press. [アダム・スミス (水田洋監訳) 『哲学論文集』 名古屋大学出版会、1993年。デューゴールド・ステュアート (福鎌忠恕訳) 『アダム・スミスの生涯と著作』 御茶

の水書房、1984年。]

Smith, Craig. 2016. 'The Essays on Philosophical Subjects.' *Adam Smith : his life, thought, and legacy*. R. P. Hanley, ed. Oxford: Princeton University Press.

———2018. 'Adam Smith on Philosophy and Religion.' *Ruch Filozoficzny*, 74(3): 23-39.

Thomson, Herbert F. 1965. 'Adam Smith's Philosophy of Science.' *The Quarterly Journal of Economics*, 79(2): 212-233.

Winch, Donald. 1978. *Adam Smith's Politics: An Essay in Historiographic Revision*. Cambridge: Cambridge University Press. [ドナルド・ウィンチ (永井義雄・近藤加代子訳) 『アダム・スミスの政治学——歴史方法論的改訂の試み』ミネルヴァ書房、1989年。]

日本語文献

生越利昭 1997 「アダム・スミスにおける方法の問題」『商大論集』第28巻第6号、48-72頁。

内田義彦 1994 『〔新版〕経済学の生誕』未来社。

只腰親和 1995 『「天文学史」とアダム・スミスの道徳哲学』多賀出版。

———1998 「スミス科学論の知性史的文脈」、田中正司編『スコットランド啓蒙思想研究——スミス経済学の視界』北樹出版。

田中正司 2003 『アダム・スミスの自然法学 第二版——スコットランド啓蒙と経済学の生誕』御茶の水書房。

———2017 『アダム・スミスの倫理学——『哲学論文集』・『道徳感情論』・『国富論』増補改訂版』御茶の水書房。

新村聡 1994 『経済学の成立——アダム・スミスと近代自然法学』御茶の水書房。

[査読を含む審査を経て、2021年5月26日掲載決定]

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)